國學院大學学術情報リポジトリ

Past, Present and Future of Popular Music Museums : Case Studies of Hibari Misora and Yujiro Ishihara : Special Issue : The 60th Anniversary of Museum Studies Courses : Problems in Museums and Museology 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Inoue, Yuta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000336

ポピュラー音楽博物館の過去・現在・未来
—美空ひばりと石原裕次郎の展示施設を事例として—

井上裕太

はじめに

音楽とは音によって表現される芸術であり、五感の中でも聴覚に依存し鑑賞する特殊性を有しているため、博物館における音楽展示は、視覚情報のみでは展示の本質を伝達することは難しく、楽器の音色や歌声等の聴覚情報を組み合わせて活用する等、工夫を凝らした内容とすることが求められる。とりわけ、展示が容易ではない音楽様式の一つとして、ポピュラー音楽が挙げられる。ポピュラー音楽は、大衆の好みを訴求した音楽であり熱狂的支持を得やすいが、一方で時代の経過と共に人々の記憶から徐々に忘れられていく宿命にあり、熱し易く冷め易い特徴を有している。それ故、ポピュラー音楽の展示を継続的に実施するのは容易ではないのである。

筆者はこれまでポピュラー音楽について音楽家の顕彰活動に焦点を当て、幅広い年齢層に興味を抱かせる活動を多角的視点により実施することの必要性について説き、「展示を足掛かりとして、その他のイベントを展開することで、人々の興味、関心の輪を広げることが音楽家への理解促進に繋がり、地域活性化の糸口となる[1]」と論じてきた。本稿では音楽家の顕彰活動の

中でも特に博物館に着目し、先行研究を取り上げポピュラー音楽の現状について整理する。その上で、歌手の展示施設を例に現在ポピュラー音楽博物館が置かれている状況を考察し、将来への展望を図りたい。

本稿では、昭和期に歌手、俳優として活躍した美空ひばりと石原裕次郎に関する展示施設を事例として取り上げる。美空は一九三七年に神奈川県横浜市に生まれ、一九四九年に「河童ブギウギ」で歌手デビューした。歌手として「リンゴ追分」「柔」「悲しい酒」「愛燦燦」「川の流れのように」等のヒット曲がある一方で、映画にも「悲しき口笛」「東京キッド」「伊豆の踊子」「あの丘越えて」「お嬢さん社長」等、多数出演し俳優としても活躍した。[2] 一九八九年に死去したが、その後国民栄誉賞が追贈された。少女時代より歌手として活躍し、NHK紅白歌合戦には計十八回出場[3]し、十三回トリを務める等、昭和を代表する歌手として確固たる地位を築いた人物である。

一方、石原は一九三四年に兵庫県神戸市に生まれ、父親の転勤に伴い北海道小樽市、神奈川県逗子市へと転居を繰り返し、一九五六年に「太陽の季節」で映画に初出演し俳優としてデビューした。その後、「嵐を呼ぶ男」「錆びたナイフ」「赤いハンカチ」「二人の世界」「夜霧よ今夜も有難う」等の映画に主演した他、同名の主題歌もヒットし、歌手としても人気を博した。一九七〇年代以降はテレビドラマを中心に活動し、「太陽にほえろ！」「西部警察」等に出演した他、歌手としても「ブランデーグラス」「北の旅人」等のヒット曲を出したが、一九八七年に死去した。俳優、歌手の他、石原プロモーションの社長も務める等、多方面で活躍した人物である。

美空と石原はほぼ同時期に活躍した人物であり、両者とも現在でも根強い人気を誇っている。歌手としてのみならず俳優としても活躍したという共通点を有しており、近年では二人の楽曲を収録したCDアルバム[4]も発売されている。そのため、ほぼ同時期に活躍した近似した歌手の比較を行うことで、博物館の在り方についてその傾向を明らかにできると考える。本稿では、両名に関する博物館の現状を整理した上で、今後のポピュラー音楽博物館の展望について提示することを目標とする。

一、ポピュラー音楽博物館に関する先行研究

ポピュラー音楽博物館に関する研究事例は僅少であるため、ここではポピュラー音楽博物館の在り方について具体的に言及した先行研究二例を俎上に載せたい。

まず、山田晴通の「立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型」[5]が挙げられる。ここでは、山田がアメリカのポピュラー音楽博物館を調査した経験から、日本国内のポピュラー音楽博物館について立地をもとに分類を試みている。まず、「出身地等の縁故地への立地」と「縁故地以外への立地」に大別し、更に前者については「新設された、当初から博物館等展示施設として使用するという前提で用意された建物に入っているもの」（新設施設）と「既存の施設に後から入る形で開設された展示施設」（既存施設）にグループ分けした[6]。そして特に縁故地以外に立地する館が散見される理由として、「展示施設の成立を支える篤志家の存在と、（顕彰の対象者ではなく）篤志家の側の縁故地への立地として説明される。」[7]と論じ、続けて「より一般的に立地を左右する要素として、潜在的な集客力という観点が重要であることは論を待たない。顕彰の対象者とどのような縁があるのか、という真正性よりも、入館者をより多く迎えたいという観点から立地が考えられることは当然あり得る」[8]と述べている。つまり、「縁故地以外への立地」を選択することについて、設立者の都合や集客力等の経済性を理由として挙げたのである。加えて、山田は「出身地等の縁故地への立地」に限ったことではあるが、ポピュラー音楽博物館の今後の在り方として三点を提案している。一点目は、真正性の演出・可視化であり、音楽家と博物館の立地との関連性の看取できるような歌碑、説明看板等の設置を通じ、真正性を強調する演出、見落とされがちな真正性の発掘を提案している。二点目は、「語り部」としての役割を担うガイドの育成である。「地域住民がボランティア・ガイドとして、地域とゆかりのある人物について語る言葉は、地域外からやってきた観覧者には、より強い地域アイデンティティと説得力を意識させることとなる」[9]と説き、ボランティアの活用、ガイドの育成を行うことで、より説得力を強めることができると訴えている。三点目は、近隣の関連施設等との連携であり、施設周辺にある別の関連施設等への案内地図の作成等、地域を巻き込んだ工夫を提案している。このように、山田は初めてポピュラー音楽博物館について分類を試み、「出身地等の縁故地への立地」の事例に限定したものではあるものの、ポピュラー音楽博物館が地域振興に資するための具体的提案を行った点で特筆すべきである。

次に、南田勝也の「ポピュラー音楽関連ミュージアム」[10]に関する論考を紹介したい。ここで南田は、ポピュラー音楽博物館のうち、著名人をテーマとした博物館について「その大半はご当地の偉人の紹介もしくはファン向けの展示となっていて、人

物の足跡を知るにはよいが、ポピュラー音楽を網羅するというアーカイブ的な目的は望めない[11]」としているが、展示内容についてそれ以上の詳細な言及は行っていない。その一方で、ポピュラー音楽を網羅的に収集している博物館として、北海道新冠町のレ・コード館を例に挙げている。レ・コード館は音楽とはゆかりのない土地に設立された施設であるが、イベントホール、図書プラザをはじめ様々な施設を含有した複合施設として機能していることから、町民の憩いの場となっている。そのことが地域の活性化へと繋がっており、その特殊性について説いているのである[12]。

以上の二例は、現在の音楽博物館の置かれている現状について平面的に取り上げ、分類や地域振興へ繋がる糸口について論じたものである。それ故に、一つの博物館が設立から閉館に至るまでの経緯について時間軸に着目し、過去と現在を踏まえた上で今後を展望することが必要であると認められる。そこで、著名人をテーマとしたポピュラー音楽博物館の現状について、その設立から閉館までの過程を踏まえ、過去・現在を俯瞰した上で未来への展望を図りたい。

二、美空ひばりに関する展示施設の変遷

まずは、美空に関する展示施設の変遷について取り上げたい。美空に関する展示施設はかつて京都市に存在していたが、現在は閉館し、それに代わり東京都目黒区内のかつての自宅を展示施設として公開している。また、一時横浜市内に美空ひばり記念館を建設する構想が浮上したものの、白紙となった経緯がある。それらを踏まえ、美空に関する展示施設の過去・現在を整理する。なお、美空の展示施設は本稿で取り上げるものの他に、長野県上伊那郡箕輪町の「美空ひばり歌の里資料館」があるが、この施設は美空と交友関係にあった関係者が私設で設立したもので、展示資料はファンからの寄贈資料が中心[13]であり、美空の遺産管理を行うひばりプロダクションとは直接的関係がないため、本稿では俎上に載せないものとする。

㈠　京都市における美空ひばりの展示施設

京都市嵐山に美空の展示施設「美空ひばり館」が開館したのは、美空の死から四年九か月後の一九九四年三月二十五日のことである[14]。設立に至るまで、横浜市、三鷹市、いわき市が建設

地として立候補[15]したが、「美空ひばり自身が京都の太秦撮影所に通っただけでなく市内に居を構えていたこと[16]」「年間千五百万人もの観光客が訪れる有数の観光地であるという立地条件[17]」が考慮され、ひばりプロダクション社長で、美空の長男である加藤和也により京都市嵐山が選ばれた。建物の建設・運営は民間業者が行い、美空の芸能史の紹介コーナーや自宅の再現コーナー[18]をはじめ、好みの曲が聞ける「ひばり歌謡史」、舞台衣装を展示した「ひばりコレクション」等十二のコーナーに約千点を展示[19]し、美空を多面的に俯瞰できる内容となっていた。しかし、入館者の減少等の理由により、二〇〇六年十一月三十日に閉館した。その後、ひばりプロダクションが運営を引き継ぎ、二〇〇八年四月二十六日に「京都嵐山美空ひばり座」としてリニューアルオープンした。美空ひばりの展示に特化した「美空ひばり館」とリニューアルした「京都嵐山美空ひばり座」との違いについて、開館当初以下のように紹介されている。

京都の実業家がつくった前身の「美空ひばり館」は、衣装などの展示が主で、入館者減のため一昨年に閉館。加藤さんが社長を務めるひばりプロダクションが約23億円かけて買収、全面改装をした。

新生「ひばり座」は、昭和という時代と、ひばりの歩みを重ね合わせながら振り返る展示がメーンとなっている。（中略）蓄音機や木製ラジオ、プロレスラーの力道山が映る白黒テレビから、ひばりが遊んだという初代ファミコンまで、懐かしい昭和のアイテムが並ぶ。それらの間に置かれた5体のひばりの等身大パネルが、思い出や時代背景などを語る、という趣向だ[20]。

つまり、美空に特化した内容だった「美空ひばり館」が入館者減で閉館した経験から、昭和の歴史の紹介に主軸を置くことで来館者のターゲットを広げ、美空のファンのみならず多くの人々を対象とした施設として生まれ変わらせる狙いがあったことが窺える。しかし「京都嵐山美空ひばり座」も、入館者減少や「嵐山には修学旅行生が多く、ファンの世代との隔たりがある[21]」という理由から二〇一三年五月三十一日に閉館するに至った。

閉館後は、京都市内から美空の展示施設が無くなることを惜しむ声が上がったことから、映画や舞台で使用された資料等は東映太秦映画村敷地内の映画文化館に「京都太秦美空ひばり座」としてコーナーが新設された[22]。美空は生涯約百六十本の映画に

出演したが、東映京都撮影所でも撮影を行っており関係が深いことから、東映所蔵の映画関連資料も加え、映画、歌、舞台に特化した展示が行われている。

以上、京都市内における美空の展示施設の変遷について整理すると、当初は美空とゆかりが深いことと観光客の多さから京都市が施設の設置場所として選ばれ、美空に特化した展示を行っていたものの、来館者の減少からリニューアルし美空を通じて昭和という時代を投影する内容に変化した。それでも来館者の減少や嵐山を訪れる客層との乖離が生じたことから、東映太秦映画村内に映画等に焦点を当てた小規模の展示コーナーが設置され、現在に至るという経緯を辿っている。

㈡　横浜市における美空ひばり記念館構想

横浜市は美空の生まれ育った街であり、初舞台を踏んだのも市内の横浜国際劇場であった。その横浜市においても、美空ひばり記念館設立の動きが顕出したことがある。先述のとおり「美空ひばり館」設立の際、横浜市は候補地として挙げられており、具体的な構想が練られていた。ここではその概要を紹介する。

横浜市内での美空ひばり記念館建設構想は、美空のファンから「ひばりさんの足跡を故郷に永遠に残したい」[23]との声が上がり一九九二年に「美空ひばり記念館建設準備委員会」[24]を発足させたことが端緒である。[25]同年六月には約二十万人の署名を横浜市長に提出し、市側も「「貴重な観光資源」などと位置付け、九四年に記念館の運営母体となる財団法人「美空ひばり文化振興財団」（仮称）への補助として一億六千万円を計上」[26]する等、建設に向けた積極的支援が行われた。また、展示資料についても、「遺品を中心に映画やテレビなどの映像作品も備え（中略）ひばりさんが受けた国民栄誉賞も飾る」[27]という構想が具体化し、記念館の建設場所についても、観光客が多く訪れる山下町と決まった。その規模について当時の記事では以下のように記されている。

> 「美空ひばり記念館」は観光施設・マリンタワー（横浜市中区山下町）の再整備事業の一環として建設される同タワー新館内に設けられる。新館は6階建てで、述べ床面積約7，300平方メートル。（中略）タレント記念館としては、九一年開館した石原裕次郎記念館（北海道小樽市、延べ床面積約3，600平方メートル）を抜き、日本最大規模となる。[28]

つまり、地区の再整備事業の目玉の一つとして大規模記念館の設置が位置づけられ、観光振興の一助となることが期待されていたことから、横浜市としても積極的に支援していたことが窺える。事実、当時の民間シンクタンクによる試算では、記念館設置による経済効果は年間四百億円[29]という数字が算出された。

また、個人を顕彰する施設は継続性が課題であるとの分析から「一部の熱狂的なひばりファンだけに頼らないで、ひばりさんを〝核〟に昭和歌謡史や大衆音楽文化などまでテーマを広げ、入館者の裾野を拡大していくことも考えるべきではなかろうか[30]」との提言もなされた他、文化庁からも「文化全般に影響を与えた人物なので幅広い事業を[31]」という要望が出されたことから、「歌謡史、戦後の庶民文化までを視野に入れた事業を展開する方針[32]」を打ち出す等、記念館の建設を契機に、横浜をポピュラー音楽文化の一大拠点とする構想が掲げられた。

一方、地元の団体[33]が中心となり、一九九三年十二月には市内に映画「悲しき口笛」出演時の美空の姿を模したブロンズ像が設置される[34]等、行政のみならず市民も含め横浜市全体で郷土の偉人として美空を顕彰する機運が醸成され、記念館建設に向けた期待が高まっていた。

しかし、先述のとおり京都市が「美空ひばり館」の建設地に選ばれたことから、「展示品をどうするかなど、細部を巡り横浜市と遺族側の話し合いが難航[35]」し、最終的に建設計画は白紙となる。横浜市としては、財団法人美空ひばり文化振興財団が発足すれば遺品が財団へ無償提供され、「美空ひばり館」へは遺品の一部を貸与する形で解決する意向[36]であったが、ひばりプロダクションとしては、京都市に先に設立した「美空ひばり館」に遺品のほとんどを提供・展示したため、横浜市には、展示資料を見せる「美空ひばり館」とは違う形の施設の設立を望んでいた[37]。更に、横浜市は入場料で財団の運営を賄う考えであったため、目玉となる展示資料は不可欠という姿勢を崩さず、最終的に話し合いが決裂するという形となった。つまり、博物館として展示資料を充実させ観光資源として活用したい横浜市側と、博物館という形に拘らず、人々の記憶に残るような施設を望んでいたひばりプロダクション側との間で齟齬が生じ、意思疎通が円滑にできなかったことが白紙になった要因[38]と言える。

現在、横浜市には先述のブロンズ像の他、生誕の地である磯子区に二〇〇九年に建てられた「美空ひばり生誕記念碑[39]」があるが、記念館をはじめとした顕彰施設として形を留めていないのが現状である。

㈢「東京目黒美空ひばり館」の開館

美空が一九七三年に東京都目黒区内に建てた自宅は、亡くなった一九八九年以降は、生前に過ごしたままの形で保存されてきた[40]。そこで、「京都嵐山美空ひばり座」の閉館後、その自宅のうち、美空の気に入っていた庭と庭に面したリビング、和室を記念館として二〇一四年五月二十八日に開館[41]したのが「東京目黒美空ひばり館」である。「京都嵐山美空ひばり座」の展示資料の一部は先述の「京都太秦美空ひばり座」で展示されたが、「東京目黒美空ひばり館」にも一部の資料が移管され、展示された。美空の自宅には以前から外観だけを見て帰るファンが多数訪れていたが、実際に美空が「いたままの場所でくつろいでほしい[42]」との遺族の願いから、記念館としての開館が実現した。住宅地に位置することから、一回三十分、六人ずつ一日九十六人のみの限定公開とし、実際に使われたテーブルで、美空の好物だったお茶菓子がふるまわれる。なお、現在記念館には、美空の存命当時から自宅で給仕していた職員が勤務している。

このように「東京目黒美空ひばり館」は、自宅を記念館として公開することで、表舞台のみならず、美空の私生活を追体験できる施設としての機能も有しているのである。

三、石原裕次郎に関する展示施設の変遷

次に、石原に関する展示施設の変遷について取り上げたい。石原に関する展示施設は北海道小樽市内に存在していたが、二〇一七年八月三十一日をもって閉館した。そこで、記念館の開館から閉館に至るまでの過去・現在を整理する。

㈠「石原裕次郎記念館」の設立

北海道小樽市に石原裕次郎の展示施設「石原裕次郎記念館」が開館したのは、石原の死から四年後の一九九一年七月二十日のことである。記念館設立にあたっては、石原は小樽で小学生時代を過ごし、海やヨットを愛した人物であったため、「裕次郎ゆかりの地であること[43]」「海に近いこと[44]」の二つの条件を満たす土地として、小樽が選定された[45]。建設計画段階では、「遺品を提供する石原プロ[46]、土地を貸す地元企業、企画・運営を担当する札幌の不動産会社[47]」の三者の協力で進められていたが、不動産会社が計画から離脱したため、急遽石原プロモーションが資金調達し、記念館を株式会社化して運営することとなった。

館内の展示資料は石原の華やかな表舞台での活躍を示す資料

から、私生活の様子の解る資料に至るまで多様であり、様々な側面から石原の人物像に迫る展示となっていた。展示コーナーは、主演映画の一部と劇中の歌唱映像が六本分放映される「裕次郎の世界」、映画「黒部の太陽」のセットを再現した「裕次郎への道」、映画「栄光への５０００キロ」で使用した撮影車やテレビドラマ「西部警察」の映像、出演映画一覧等を示した「俳優 裕次郎」、レコード大賞をはじめとするヒット曲に纏わるトロフィーや出演したテレビコマーシャルを放映する「スター 裕次郎」、二百十六枚分のレコード・ＣＤジャケットを展示する「歌手 裕次郎」、出演した映画やドラマで着用した衣装や私服等、服の展示に特化した「裕次郎コレクション」、ヨットキャビンの断面再現や靴、双眼鏡等ヨットに関係する資料を展示する「海と裕次郎」、メルセデス・ベンツやロールス・ロイス等の愛車を紹介する「タフガイ裕次郎」、ビリヤード用具、ゴルフ用具、別荘のあったハワイで使用した愛車等、休みの日に使用した用具類を集めた「裕次郎の休日」、都内の自宅のリビングや食堂等を再現し、結婚式の衣装や食器、スーツ、Ｙシャツ、ネクタイ、コート、アクセサリー類等を多数展示する「裕次郎の部屋」、小学生時代の書や工作、中学生・高校生時代に描いた絵画等を紹介する「芸術家 裕次郎」、石原まき子夫人との映像やゆかりの人物との共演映像、インタビュー映像を放映する「裕次郎と仲間たち」に分けられた[48]。上記十二コーナー約二万点[49]に及ぶあらゆる角度からの石原の展示を行うことで、表舞台のみならず、私生活も含めた石原の魅力を感じ取れる工夫がなされていた。

このように、石原に纏わるあらゆる展示を行ったことで、「小樽に欠かせぬ観光ポイント[50]」として開館当初は多くの観光客が訪れ、入館者は年間百万人[51]を超える等、大盛況だったという記録が残っている。

(二) 「石原裕次郎記念館」の閉館と現状

「石原裕次郎記念館」は、先述の通り記念館を株式会社化して運営していたが、ファンの高齢化も影響し入館者が落ち込んだことから、経営を改善するため二〇〇八年六月一日より石原プロモーションの直営として運営することとなった[52]。このことについて石原プロモーションは当時「入館者は減っていたが、利益は1億円以上で、無借金で黒字経営。石原プロと記念館を合併させ、東京で持っている企画力と宣伝力を活かし、所属する役者を小樽に派遣し、小樽にさらにお客さんが来てくれるように、組織再編する[53]。」とのコメントを残しており、石原に関

する企画・運営を一元管理し効率的に経営するねらいがあったと推察できる。

その後、二〇一二年四月二十五日には、小樽市内でも観光客の集まるエリアとしても知られる小樽運河沿いにトリック写真等[54]の撮影ができる「石原プロおもしろ撮影館」を開設[55]した。小樽には日本人観光客のみならず、中国をはじめとした諸外国からも多くの観光客が訪れるため、あらゆる客層をターゲットとして、石原とは直接的な関係のない撮影館を開設したと考えられるが、二〇一四年九月三十日に閉館している[56]。

そして、「石原裕次郎記念館」自体も、二〇一七年八月三十一日をもって閉館となった。閉館の理由として、「ファンの高齢化が進む一方、小樽観光の中心として発展した小樽運河から離れていることなどから入場者が減少[57]」した点、「海沿いの建物は塩害もひどく、改修には多額の費用が見込まれる[58]」点、映像機器の更新が「予算的に難しい[59]」点が挙げられる。閉館後は、資料の一部を全国で展示する巡回展の開催が計画[60]されている。

一方で、小樽市には記念館に展示されていたロールス・ロイスが寄贈され、小樽市総合博物館に展示されることが決定した。幼少期を小樽市で過ごした石原の愛車を小樽に遺して展示することで、小樽が石原ゆかりの地であることや「石原裕次郎記念館」が小樽のシンボルとして存在していたことを後世に伝える[61]資料として活用がなされている。また、閉館直前には小樽駅に多くの資料が寄贈され、「裕次郎メモリアルルーム[62]」と題した展示が駅構内で二〇一七年八月二十四日から九月三日まで催される等、閉館決定後も継続して小樽市と運営する石原プロモーションによる石原の顕彰と観光振興がなされている。閉館に際し、石原プロモーションは「裕次郎の面影を小樽に残せるよう、市と協議したい[63]」と述べる一方、小樽市長も「小樽との関係が途切れることのないよう考えたい[64]」とコメントしており、小樽市の文化の一部として石原を位置付けていることが窺える。

以上、石原の展示施設の変遷について整理すると、石原ゆかりの地として小樽市が記念館の設置場所として選ばれ、石原の人物像に迫るあらゆる展示が行われたものの、来館者の減少や建物の塩害被害等の影響により閉館に至っている。閉館後は巡回展を実施し引き続き全国のファンに展示を見てもらう場を創出する他、一部資料を小樽市に寄贈し、石原を地域ゆかりの人物として引き続き顕彰する活動が行われており、形を変えながらも小樽市のシンボルとして石原が位置付けられているのである。

四、まとめ

以上、美空と石原の展示施設の過去・現在について状況を紹介した。それを踏まえ、施設の立地、展示内容、地域との連携といった観点から、美空と石原の展示施設の在り方について考えたい。

本稿で紹介した美空と石原の展示施設及び設置が検討された施設について立地の観点から整理すると、いずれの施設も縁故地に設立されたことが解る。山田はその中でも「京都嵐山美空ひばり座」について、「横浜出身の美空ひばりを取り上げた展示施設である、京都嵐山美空ひばり座（京都市右京区）の場合、ホームページにアクセスすると「京都は私の第二のふるさとなの　美空ひばり」という文字が最初に画面に表示される。美空ひばりが、特に一九五〇年代において、時代劇映画の撮影のためにしばしば京都に滞在したことは事実であるが、歌手・美空ひばりという観点からするとホームページ冒頭の美空ひばりの言葉は、あまり説得力が感じられるものではない[65]」と評価し、「縁故地以外の立地」に分類しているが、設置場所選定の第一の決め手として「太秦撮影所に通っただけでなく市内に居を構えていたこと」[66]を挙げている点を考慮すると、「縁故地への立地」に分類することが妥当である。

次に展示内容について検討する。本稿で取り上げた施設の展示内容は大きく三つに分類できる。

一つ目は音楽家の「公」の部分の展示である。映画、歌、舞台といった音楽家としての表舞台に特化した「京都太秦美空ひばり座」がこれに該当する。

二つ目は音楽家の「私」の部分の展示である。自宅を記念館として公開し、プライベートを中心に紹介する「東京目黒美空ひばり館」がこれに該当する。「東京目黒美空ひばり館」では自宅をそのまま公開しているため、美空が暮らしていた様子を追体験でき、真正性が担保されている。加えて、美空の存命中から勤めていた職員が現在でも記念館で勤務しているため、語り部としての役割も果たしていると言える。また、「公」「私」の両面を展示する施設として、京都市の「美空ひばり館」と「石原裕次郎記念館」が挙げられる。どちらの施設も、縁故地に新設された記念館であるものの、芸能人としての側面のみならず、自宅を再現したコーナーをはじめ私生活の解る展示が設けられており、あらゆる角度から人物像に迫れる工夫が施されている。しかし一方で、音楽家のファンの来館は期待できるものの、そ

れ以外の客層の来館が期待できないという問題点がある。経年によりファン層の高齢化に直面すると、それは来館者の減少に直結してしまうのである。

そして三つ目は、音楽家に付随する周辺情報（時代背景、関連音楽等）を含めた展示である。美空を通じて昭和という時代を投影する内容であった「京都嵐山美空ひばり座」や歌謡史、戦後の庶民文化までを視野に入れる予定であった横浜市の「美空ひばり記念館構想」がこれに該当する。前者は近隣に寺社をはじめとする観光名所が多数あり多くの修学旅行生が訪れる嵐山に位置したため、他の観光地の中に埋没し嵐山を訪問する客層を取り込めず閉館に至ったものの、時代背景と共に展示することでファンのみならず幅広い客層を取り込むという狙いは特筆すべきである。

最後に地域との連携という観点から、美空と石原の展示施設を比較する。

美空の展示施設は地域との連携が希薄である。その理由の一つとして、ひばりプロダクションの顕彰姿勢が挙げられる。横浜市の美空ひばり記念館構想が白紙撤回となった際、ひばりプロダクション側は「（ひばりは）エンターテイナーだったんで、地方を回って、こちらから各地の皆さんに、いろいろなものをお見せする、という形を崩したくない。（記念館などで）名前を残すより、人（の記憶）に残していきたい。一〇〇年後、自分が死んでから（記念館が）さびれた博物館のようになっているのは悲しいですから[67]」と語っている。一箇所の土地に根差して有形の記念館として公開するのではなく、記念館という形に拘らず人の記憶に残るような無形の財産（歌声、映像等）を各地のファンに伝えるという姿勢が根底にあるため、地域の中での横の繋がりよりも、美空をより深掘りする施設が展開されていると考えられる。現在も存続している「京都太秦美空ひばり座」では美空のスター性に着目して芸能人としての華やかな側面が紹介されており、「東京目黒美空ひばり館」では美空の私生活に着目し生家を公開している。いずれも美空についてより深く知ることのできる施設であり、新規の来館者を獲得しにくい反面、コアなファンの来館を見込むことができる。どちらも施設を新設したのではなく、「京都太秦美空ひばり座」は「東映太秦映画村」内の一コーナーの展示に組み込んでおり、「東京目黒美空ひばり館」は美空没後も継続的に管理されていた生家をそのままの状態で公開し、予約制とすることで、無理のない範囲で来館者を迎えることができている。このように、美空の展示施設は、既存施設を活用し、施設存続のための負担を最

小限に抑えつつ、顕彰を持続しているのである。

一方、石原の場合は地域との連携を重視していることが窺える。地元の駅への展示ギャラリーの設置や、「石原プロおもしろ撮影館」の開設は観光振興に主眼を置いた取り組みと言える。また、地元の夏祭りである「おたる潮まつり」では、「おたる潮まつりで石原裕次郎を唄う」[68]と題したカラオケ大会を実施した他、冬季には街中でキャンドルを灯すイベント「小樽雪あかりの路」[69]に参加する等、地域との連携に力を入れているのである。一方で行政（小樽市）では、石原をはじめとした郷土の音楽家の顕彰を積極的に実施している。小樽市のホームページでは、小樽ゆかりの音楽家や流行歌について紹介[70]している他、近年では、小樽運河プラザ[71]や市立小樽文学館[72]においてサカナクションのメンバーで小樽市出身の山口一郎に纏わる展示を行っている。こうした音楽家を顕彰する土壌があるからこそ、小樽市総合博物館へ寄贈された石原のロールス・ロイスについても、地域と音楽家を繋ぐ資料として活用が期待されているのである。

以上、石原の展示施設は、閉館後も地域との関係に重きを置いており、ファンのみならず地域の人々にとっても郷土ゆかりの人物として石原を受容できる環境が整えられていると言える。閉館後は恒常的に資料を見学できる施設はないものの、全国への巡回を行うことで、実物資料を不定期的ではあるものの見学できる機会が設けられている。このように、地域とファンそれぞれとの関係性を重視した二元的な顕彰姿勢が看取できるのである。

五、未来への展望

本稿では美空と石原の展示施設の変遷について分析した。どちらもファンの高齢化等の理由による来館者減の影響を受け、前者は既存施設を活用し対象をファンに特化させた施設の運営に、後者は不定期的な巡回展の開催による対象をファンに特化した展覧会を開催すると共に、地域に資料を寄贈することで小樽の地域文化として石原を根付かせていくことが窺える。最後にこれらを踏まえ、ポピュラー音楽博物館の未来への展望を図りたい。

ポピュラー音楽の問題点は、嗜好者（ファン層）が固定化し、嗜好者の拡大が望めない点にある。そこで少しでも裾野を広げるためにも、山田の指摘するような真正性の演出・可視化、「語り部」の活用、近隣の関連施設等との連携が重要になる。秋田市の東海林太郎音楽館では、ホームページ上で「秋田市・東海

林太郎マップ」[73]を公開しており、地図上に東海林太郎音楽館、胸像、生家の石灯籠、生家跡の記念碑、少年時代に登った松が示されている。また、青森県黒石市では、街中のあらゆる施設の集合体を「黒石市小さなまちかど博物館」[74]と名付け街歩きマップを作成し、その中の一つとして「昭和歌謡博物館（黒石市ゆかりの作曲家私設資料館）」[75]を位置付けている。このように、展示施設のみならず近隣と連携し、地図等を作成し関連情報を可視化することで、来館者は真正性を感じることができるのである。石原の事例では、閉館後に資料の寄贈が行われたが、施設の運営と併行して恒常的に地域との連携を進めることが重要である。

一方で、「東京目黒美空ひばり館」では、美空存命中からの職員が勤務しており、「語り部」としての役割を果たしていると言える。我が国で初めて音楽博物館論を説いたとされる兼常清佐[76]は、実際に音楽家が居住していた空間で、音楽家自身の生活感が感じ取れるような仕組みの構築を訴えており[77]、一九二二年八月二十八日にドイツの「リストの家」を訪問した際、「語り部」について「リストに仕えた女と、リストの家で親しく語ることの出來るのは誠に珍らしい」[78]と評価している。このように「語り部」としての機能を活用することで、音楽家の人物像を網羅的に体感でき、音楽家について直接的に知らない世代にも、「公」の部分のみならず「私」の部分も含めてあらゆる情報を提供することで共感が得られやすくなるはずである。代替わりしても、証言を語り継ぐことで、真正性が担保され続けるに違いない。

以上のように、山田の指摘する三点を実現することで、地域文化の一部として音楽家が捉えられるようになり、来館者の対象をファンのみならず幅広く拡大することが可能となるのである。

更に、南田の言及したようなポピュラー音楽を網羅する施設についてもポピュラー音楽博物館の未来像を俯瞰する上で必要となる。横浜市の美空ひばり記念館構想では、美空を核とした昭和歌謡史や大衆音楽文化の展示に関する提言がなされたが、我が国では未だポピュラー音楽を網羅的に扱った博物館は無いのが現状である。[79] スウェーデン・ストックホルムのアバ博物館（ABBA the MUSEUM）には、スウェーデン音楽の殿堂（Swedish Music Hall of Fame）が併設されており、二十世紀のスウェーデンのポピュラー音楽史が俯瞰できるような展示がなされている。[80] つまり、スウェーデンを代表するバンドであるABBAの展示だけでなく、スウェーデンのポピュラー音楽史も

一緒に学習できる仕組みが構築されているのである。また、韓国・慶州の韓国大衆音楽博物館（한국대중음악박물관）では、韓国のポピュラー音楽史を年代順に展示するばかりではなく、日本の植民地時代の音楽への影響等、時代背景も含めて明示する内容となっている[81]。このように、単なる音楽家個人としての要素だけでなくそれを足掛かりに音楽史全体を学習できる仕組みや、音楽史と共にその時代背景を紹介する工夫を施すことが今後我が国においても必要となるはずである。

おわりに

本稿では、ポピュラー音楽博物館について美空と石原の事例を取り上げ、ファンを取り込んで多くの来館者を得ていた過去、ファンの高齢化と共に来館者が減少したため、大規模施設ではなく生家の公開や不定期的な巡回展開催等、無理のない形でファンを対象に運営する現在を紹介した。更にそれらを踏まえ、ファンのみならず多くの人々を取り込むべく、音楽家の「公」「私」を足掛かりに周辺情報を展示する、地域における音楽家の存在価値に焦点を当てた様々な試みや、ポピュラー音楽を網羅的に扱う博物館設立等、未来への展望を図った。

本稿で描いた未来像を実現するには、行政や対象となる音楽家の関係者（遺族や音楽業界）等が関係を強化し、連携した取り組みを推進する必要がある。これまで、両者が協働した事業は積極的に展開されておらず、その状況について「知の分断[82]」と呼ばれている。一人の音楽家に特化した展示施設は一時的には多くの来館者が見込まれるかもしれないが、長期的に考えると本稿で取り上げたような問題が発生する。そのためにも、地域文化の一部として音楽家を紹介する試みや、一人の音楽家を核としてポピュラー音楽全体を保存していく試み等、あらゆる関係団体が連携し、新規の客層を取り込みながら顕彰を続けていくことが必要ではないだろうか。

註

（1）拙稿　二〇一五「音楽家顕彰活動における博物館の関わり―秋田県出身の流行歌手・東海林太郎と上原敏の事例を中心に―」『國學院雑誌』116（5）　國學院大學　pp.（1）-（17）

（2）このうち、「悲しき口笛」「東京キッド」「伊豆の踊子」「あの丘越えて」は同名の楽曲も発売され、ヒットした。

（3）うち一回（第三十回ＮＨＫ紅白歌合戦）は特別出演という形での歌唱だったため、通常、出場回数には含まない。

（4）二〇一六年に発売された「昭和レジェンド―美空ひばりと石原裕次郎

―」では作詞家・なかにし礼監修のもと、美空ひばりと石原裕次郎の楽曲のうち、なかにし作詞の作品を集め、収録している。

（5）山田晴通　二〇一三「立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型」『東京経済大学人文自然科学論集』（134）東京経済大学人文自然科学研究会　pp.3-23

（6）山田は「縁故地以外への立地」については、いずれも「新設施設」であり、「既存施設」を利用した事例は確認できないとしている。そのため「縁故地以外への立地」については細分化していない。

（7）註5に同じ。

（8）註5に同じ。

（9）註5に同じ。

（10）南田勝也　二〇一三「ポピュラー音楽関連ミュージアム」『ポピュラー文化ミュージアム―文化の収集・共有・消費』（石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編）ミネルヴァ書房　pp.131-149

（11）註10に同じ。

（12）筆者もこれまで新冠町の地域振興への取り組みについて調査を行っている。レ・コード館は地域の理解を得るべく、他の機能も併設した「生涯学習センター」として設立された経緯があることから、娯楽としての性格が強いことを明らかにした。一方で、レコードを収集するに留めているため、それらを活用した研究機能の強化を課題として挙げた。拙稿　二〇一六「音楽による地域振興と博物館の役割」『國學院大學大學院紀要―文学研究科―』（47）國學院大學大学院　pp.(181)-(201)

（13）美空ひばり歌の里資料館のご案内
http://www.026.co.jp/misora/shiryoukan.html（二〇一七年八月二十七日閲覧）

（14）豊久緑　一九九四「嵐山に不死鳥舞う「美空ひばり館」完成　春や春ひばりが京で 歌うかな」『サンデー毎日』73（17）（4026）毎日新聞出版　pp.8-9

（15）横浜市は美空の出身地であり、いわき市は代表曲「みだれ髪」の舞台であることから立候補したと考えられる。なお、三鷹市と美空との縁故は不明である。

（16）一九九四「注目される個人記念館の施設づくり―美空ひばり「回顧録」&「手塚漫画全集」との実体験」『レジャー産業資料』27（8）（335）綜合ユニコム　pp.48-51

（17）註16に同じ。

（18）註16に同じ。

（19）一九九四年三月十七日「京都・嵐山に「美空ひばり館」が完成」『読売新聞』大阪朝刊　pp.31

（20）二〇〇八年五月二日「ひばりと「昭和」を満喫　京都・嵐山の記念館を新装」『読売新聞』東京夕刊　pp.8

（21）二〇一三年四月二十七日「嵐山「ひばり座」閉館へ　展示品 東京の自宅で公開」『読売新聞』朝刊　pp.35

（22）「京都嵐山美空ひばり座」の閉館を惜しんだ関係から東映太秦映画村への施設の移転・継続を提案されたひばりプロダクションが、東映へ相談し、コーナーの新設が実現した。
二〇一三年九月三日「ひばり座 映画村で再生 来月12日 東映撮影所の資料を加え」『読売新聞』京都朝刊　pp.25

（23）一九九六年六月二十二日「美空ひばり、ハマの記念館焦がれ節 死後7年 ファン切々 24日命日」『読売新聞』東京夕刊

（24）一九九三年には「美空ひばり記念館建設推進委員会」と名称を改め、建設に向けて活動を活発化させた。

（25）松本努　一九九四「95年末の開館を目指す「美空ひばり記念館」」『ＳＥＲＩまんすりー：明日の地域と企業の情報誌』32（8・9）

(376)　静岡経済研究所　pp.44-45
(26)　註23に同じ。
(27)　註23に同じ。
(28)　註25に同じ。
(29)　註25に同じ。記念館への入場者は年間百四十三万人、横浜へ新たに足を運ぶ観光客は年間八十万人増加、周辺の観光施設への入場者も年間三十万人増加、交通費や食費等の周辺への波及効果を含めると横浜市内への経済効果は年間四百億円という試算がなされた。
(30)　註25に同じ。
(31)　一九九六年十二月十一日「横浜の記念館構想頓挫 足跡保存の意義考え「ひばり文化」継承を」『読売新聞』東京朝刊　pp.19
(32)　註31に同じ。
(33)　宮川町商栄会協同組合、美空ひばり記念像設立委員会、野毛地区街づくり会の三団体。
(34)　註25に同じ。
(35)　註23に同じ。
(36)　註25に同じ。
(37)　一九九六・十一「加藤和也独占告白「美空ひばり記念館を中止した理由を初めて話そう」」『週刊現代』38（41）（1909）　講談社 pp.27-30
(38)　その他、財団のシステムや記念館設立のための出資金について食い違いが生じたことも要因とされている。
(39)　美空ひばり記念碑のお披露目　磯子マガジン http://isomaga.com/topics/090524_hibari_hi.htm（二〇一七年八月二十七日閲覧）
(40)　二〇一三年五月二十三日「美空ひばり宅 記念館に」『読売新聞』夕刊 pp.5
(41)　註40に同じ。
(42)　二〇一四年五月二十六日「美空ひばりさん 自宅公開へ 記念館として28日オープン」『読売新聞』東京朝刊　pp.34
(43)　一九九一・八「北の国・小樽の海辺にできた「石原裕次郎記念館」まき子夫人が明かす「裕次郎が残した一番大切なもの」」『サンデー毎日』70（35）（3877）　毎日新聞出版　pp.174-177
(44)　註43に同じ。
(45)　当初は都内の自宅をそのまま記念館として公開する計画も浮上したが、住宅地に位置するため近隣への影響を考慮し断念した。
(46)　正式名称は「石原プロモーション」である。
(47)　註43に同じ。
(48)　筆者は二〇一六年十二月十四日に石原裕次郎記念館を訪問した。開館当初の記録と照らし合わせ、展示内容は当初から大きな変更がなされていないことを確認している。
(49)　二〇〇八年五月二十日「ボスのピンチはオレらが救う 不振の裕次郎記念館、石原プロ直営に」『読売新聞』東京朝刊　pp.34
(50)　斎藤章　一九九三・五「おもしろカルト博物館 嵐を呼ぶ男、裕次郎ファンが泣いて喜ぶ 石原裕次郎記念館」『旅』67（5）（794）　新潮社 pp.96
(51)　註49に同じ。
(52)　二〇〇九年七月は石原の二十三回忌にあたり、石原プロモーションとして記念イベントも計画していた。
(53)　裕次郎記念館が〝石原プロ〟と合併（二〇〇八年五月二十日）　小樽ジャーナル http://otaru-journal.com/2008/05/post-2510.php（二〇一七年八月二十七日閲覧）
(54)　シロクマやゴリラのオブジェや、時代劇のシーンの再現等の展示も

行った。

(55) 二〇一二年四月二十六日「石原プロ流記念撮影　運河の街に新名所」『読売新聞』北海道朝刊　pp.38

(56) 小樽市内の観光客の多く訪れる場所に位置していたものの、石原とも小樽とも関係性の薄い施設であったため、観光客の取り込みという点で苦戦したと考えられる。

(57) 二〇一六年八月二日「裕次郎記念館閉館へ　来年8月末」『読売新聞』北海道夕刊　pp.11

(58) 註57に同じ。

(59) 小樽の「石原裕次郎記念館」が見納め―今年閉館する3つの理由とは　北海道ファンマガジン　https://pucchi.net/hokkaido/funlog/201701yujiromuseum.php（二〇一七年八月二十七日閲覧）

(60) 二〇一六年八月三日「裕次郎記念館　閉館後に巡回展構想　運営会社小樽市に展示品寄贈も」『読売新聞』北海道朝刊　pp.34

(61) 【裕次郎記念館閉館】小樽に裕次郎さんの愛車を遺していくためのご支援を！　https://www.furusato-tax.jp/gcf/195（二〇一七年八月二十七日閲覧）

(62) 小樽駅ホームに裕次郎ルーム　等身大パネルや直筆サイン展示　北海道新聞　https://www.hokkaido-np.co.jp/article/127498（二〇一七年八月二十七日閲覧）

(63) 註60に同じ。

(64) 註60に同じ。

(65) 註5に同じ。

(66) 註16に同じ。

(67) 註37に同じ。

(68) おたる潮まつり　http://otaru.ushiomatsuri.net/（二〇一七年八月二七日閲覧）

(69) 小樽雪あかりの路　http://yukikarinomichi.org/（二〇一七年八月二十七日閲覧）

(70) 小樽市：おたる文学散歩 第15話 小樽と流行歌　https://www.city.otaru.lg.jp/simin/koho/bungaku/1909.html（二〇一七年八月二十七日閲覧）

(71) 小樽運河プラザでは、山口の使用したギターから幼少期の私物に至るまで、あらゆるゆかりの資料が展示されている。

(72) 市立小樽文学館では、二〇一七年一月二十六日から七月三十日にかけて、山口が影響を受けた文学作品を紹介する「サカナクション・山口一郎さんの本箱展」が開催された。

(73) 「秋田市・東海林太郎マップ」　http://www.donpu.net/tarotya.htm（二〇一七年八月二十七日検索）

(74) 「展示品や学術資料などを見学する従来の博物館ではなく、ものづくりの技店、販売の技人、資料、建物等、小さな個性をその土地ならではの「文化」として捉え、仕事場の一角や店などで人の語りと共に見学や体験ができる、新しい形の博物館」として機能させている。黒石市小さなまちかど博物館　http://www.city.kuroishi.aomori.jp/Citizen_Info/Cit_Machikado_Hakubutsukan.html（二〇一七年八月二十七日検索）

(75) 黒石市出身の上原げんと、上原賢六、上原隆治、山田栄一、明本京静等の作曲に関する資料を展示する、土蔵を再利用した施設である。

(76) 兼常は一九二二年から一九二四年にかけ、音楽研究のためドイツへ留学し、各地の音楽博物館を訪問した際の様子や感想をエッセイ集『音樂巡礼』に書き残している。

(77) 拙稿　二〇一五「兼常清佐の洋行記録にみる音楽博物館論―『音樂巡

礼』を中心に―」『人間の発達と博物館学の課題　新時代の博物館経営と教育を考える』（鷹野光行、並木美砂子、青木豊編）同成社 pp.196-211

(78) 兼常清佐　一九二五『音樂巡礼』岩波書店

(79) 古賀政男音楽博物館では、館内に「大衆音楽の殿堂」として大衆音楽界で功績を残した人物を顕彰する取り組みを実施しており、企画展では、古賀政男に固執せず、あらゆるテーマを取り上げているものの、ポピュラー音楽史を総合的に展示した施設とは言い難い。また、レ・コード館では、レコードに関する展示コーナーや収蔵レコードの鑑賞コーナーはあるものの、ポピュラー音楽全般に関する展示は行っていない。

(80) 筆者は二〇一五年九月十二日にアバ博物館及びスウェーデン音楽の殿堂を訪問した。

(81) 筆者は二〇一七年三月二十七日に韓国大衆音楽博物館を訪問した。

(82) 村田麻里子　二〇一六「ポピュラー文化を展示する：スポーツ・マンガ・ポピュラー音楽を事例に」『関西大学社会学部紀要』47（2）関西大学社会学部　pp.19-43